

(国労本部『国鉄新聞号外 国鉄闘争に連帯する会特集 第?号』○六年七月二〇日刊原稿
本文二千字)

音威子府・稚内・名寄・旭川四闘争団を訪ねて

国鉄J R問題懇談会・下山房雄

国鉄J R問題懇談会とは、昨○五年の七・一五集会(国鉄労働者一〇四七名の解雇撤回! 原告団・闘争団・争議団を励ます全国集会)を呼びかけた学者文化人三六名の中で、単に呼びかけ人に名を連ねたで終わらせずに、今後も闘争を支援していくために心身を動かし時間を割くことを決意した六人(山口孝、芹沢寿良、戸塚秀夫、師岡武男、塚本健、私)で作った同人組織である。そこに「連帯する会」山下事務局長から、七月四〜六日の日程で闘争団激励ツアーを組織するから参加しないかとの意義あるお誘いがあった。都合のついた戸塚、塚本、私に参加し、標記の四闘争団を訪問、団員・家族等からお話を伺い、また事業団活動の現場見学を行った。一〇四七名解雇が不当労働行為であったことを司法に初めて認めさせた九・一五判決を叩き出した原

動力がどういふ人々によつて生み出され担われてきたのかを、北海道のヨーロッパ的風景―広がる牧草地に円筒状の干し草の束が転がって点在する風景が典型―の中で実感できた忙しかつたけれども素晴らしい旅だった。

出発直前の七月二日午後、私と折々にメールで通信を交わしているフランス労働社会学の大家で私より一〇歳年長八三歳のマルク・モーリスに次の便を送った。なお彼は、現代絵画の始祖＝セザンヌの没後百年行事でいま賑っているエックス・アン・プロヴァンス市に住む。――「(前略)」ところで僕は、君がセザンヌ展(グラネ美術館でやっている?)に行く予定の日に、梅雨の無い北海道に向けて羽田空港を発とうとしています。旅行のテーマあるいは目的は、国鉄民営化の折りに解雇された労働者を激励するためです。彼らは組合差別という不当な解雇に反対してほぼ二〇年近く、闘い続けているのです。生きるために彼らは労働者生産協同組合を創り、経営しています。元大学教員もしくは研究者だった僕たちは、彼らの味噌、羊羹、魚介加工食品などの工場を訪ね、見学しようとしています。君がこの九月に我が家に泊まる時には、それらの食品を味わうことができるでしょう。實際上、僕たちが彼らを激励するといふよりも、むしろ僕たちが彼らの戦闘的努力に励まされることになるでしょう。(後略)――

マルクからすぐに来た返信には次のようであった。――「(前略)北海道労働者の

支援者としての君の戦闘的活動に僕はいつものように感激しています。その活動には勇氣も要るし、費用もかかります。そういう点で僕は到底君には及びません。しかし二〇〇七年の大統領選挙の候補者選択に参加するために、僕は社会党に加入しました。いままではシンパではあったけれども加入はしていなかったのです。僕は、フランスとヨーロッパの将来のために、この選挙が極めて重要と考えています。ヴィルパンおよびサルコジと闘わねばなりません。僕はフランス左翼が団結することを期待しています。とりわけ極右のルペンに対して。僕なりの戦闘的活動です。」

さて私たちの「闘争団激励交流の旅」は、たった三日間の訪問だったが、得た知見、受けた感銘はたいへん大きいものだった。例えば、新自由主義イデオロギーの影響のもと、労働運動周辺でも、年功的生活賃金Ⅱ家族賃金は女性差別賃金で廃棄すべきであり職務給に交代すべきものといった学者の提言が喝采を浴びている状況のもので、二〇年近く「組織自活」といわれる収入のプール、生活必要と妻収入を考慮した配分（国労本体から自立した争議団運動として鉄建公団訴訟に踏み切ったため、国労生活援助金停止、統一物販ネットからの排除等による総収入の減のもとで十数万円の一律配分に移行の傾向）が維持されてきた。地域に根ざした労働者と家族の連帯の共同体的固さに改めて驚く。その絆に支えられて、解雇前後に結婚、出産、そしてその後の進学等での深刻な悩みを経ながらの子育てを何とか終わり、子供達が立派に独立して

生活を始めた家族が多い。悩みは親の介護、そして自分たちの老後の生活展望というのが現段階である。年金保険料納付期間は、国鉄時代十年前後、その後は国民年金で納入免除という形が多く、これから国年保険料をフルに納めていっても受け取る年金は十万円余、免除を続ければ六万余で、地位確認で年金資格の復活が無いと老後生活は成立しないという事例が殆どであった。

闘争団事務所で見かけた政党ポスターは、民主党、社民党、新社会党の三党。民主党が極右及び右翼との混成体だという点を措けば、いずれも社民勢力だ。長期の激しい争議を担えるのは、強いイデオロギーを持った共産黨員か、極左Ⅱ「新左翼」潮流の労働者という私の認識枠組みは訂正を迫られた。社会民主主義が世界史の上で帝国主義との妥協者、協力者だった史実は消せないが、それが産業の民主主義を支える労働組合活動と連動する積極的思想の役割を果たした場をこの日本でも有したのもまた確かだと認識したのである。